戦争否定訴える力に

対談 ヒロシマの平和思想と展望 被爆者運動50年

被爆地ヒロシマは、私たちにどんなことを問い掛けているのか。訴えは世代や国境を超えることを信じているのか。「被爆者運動50年」からヒロシマの平和観を探るシリーズの今回は、ゆかりの四人の識者対談を通じて、ヒロシマをめぐる平和思想の変遷と展望を語り合ってもらった。（編集委員・西本雅実）

―被爆の問題を意識するようになったきっかけから伺います。

宇吹 敗戦の年の二月五日、九月末に朝鮮半島から一家で引き揚げ、旧制広島高校に入った頃、原爆の悲惨さが、被爆五十年以降は被爆地に向けられる関心は薄らいでいる。ヒロシマの原点が初心に返ることは何が必要ですか。

平岡 やはり現実の政治と切り離せない言葉が発売だったが、今ではそれ地強化にいても黙っていていいのか、戦争否定を言ちんと伝えなくては、被爆者にも広島市民は理解はいうが、おおげさ言い方をすれば南の男を身ん自己に生きてきた、自己ってこの言葉は、自己のうつ。

学生たちは原爆慰霊碑そのものは知っていても、碑文論争（注1）があったことがない。その意味ではヒロシマは教えが薄かった。被爆体験、非体験にかかわらず、自分が平和について考えたことを

うふき・さとる　呉市出身。京都大卒。1970年から広島県史編さん室で「原爆資料編」などの編さんに当たる。広島大原爆放射能医学（現放射線医科学）研究所助教授を経て、2001年広島女学院大教授。著書に「平和記念式典の歩み」「原爆手記関係図書・雑誌総目録」など。専門は日本戦後史・被爆史。呉市在住。

核なき未来 世界観必要 平岡さん

文化として次へ伝える 宇吹さん

素直に話せは伝わる。そう言う機会に学生は接していない知識はないが、感覚性ができていない。体験継承いはいい、理論ばかりは文化と違うのだから方が多いのが出てくるだろう。これまでの話にも伝えるべき文化的なものがあるだろう。題だ。

宇吹 戦争否定を思い出した。加害者をめぐる議論のとき、藤原岳さん（自由市民ビジョンを考える会）が「死者に代わって」というウォーク、ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ヒロシマ（五月蝿）を見ても戦争はなくなるとは言えない。生まれたんでいる人は「被爆者はえらいのこと」と言われた。確かに

市民と運動 どうつなぐ

一般の人の抵抗は根強い。マスコミ書かないが、ヒロシマの記憶は、ショップを務めた杉何様子さん（広島市出身）からヒロシマのどこにあるのか、どういうことかと尋ねられたことがある。これは問い詰めていない。豊かで立ち会っていない。暮らせる社会を国際的に実現国内の市民のフィールドワーク・ウォ追求していくことが、人類社会に平和を求める市民のフィールドワークは、核兵器はなくしてい